

建造物の色彩—らしきから考える—

山 岸 政 雄

はじめに

建造物に色彩があって、その使われかたや、脈絡のありかたを問題にするのが今回の主題である。そのありかた（在り方、有り方）は、たとえば赤い橋と青い橋の違いを語る有様（ありさま）としても、あるいはまた、橋の塗料やコンクリートから反射される、スペクトル反射率による特性からも説明できる。しかしながら、山奥深い清流の谷川を渡る橋の色彩のありかたは、どのようにして説明したらよいのであろうか。そのもうひとつの概念の主格がらしきである。赤い橋が好感を与えるのはどんな風景や景色のときか、あるいは茶色の橋がいつもあいまいで不明瞭感を残しているのは何故かなど、原因にらしきが大きく関わっていることがしばしばである。いかにもとか、なるほどといった、余韻を含んだゆらぎ感覚も大切な評価の要因となってきた。このことは内部空間についてもいえる。たとえば、病院における配色は好例である。病室は内科、外科、小児科、産科、精神科それぞれに配色が違うべきであるとの考えなどである。小児科らしいためには、明るくて暖か味のあるやわらかな色彩でなければならない。しかしいっぽう、手術室のように、常時赤い血液が鮮やかに見える必要のあるところでは、色彩は機能的に使われる。青緑系の色彩が手術室の腰壁やドアに必要なのは、らしきではなくて緑の色刺激が除かれた後に続いて起こる視覚感、つまり赤の色残像が血液に被ることを予定した機能色彩なのである。したがって術衣も緑色である。リゾート地に多い緑の丘の赤い屋根はこの機能がアクセントカラーとなったものである。

このように、らしきは土地の風土や歴史、自然や人工の条件をよく見極めた上で決められる、

合意形成の精神的選択行動であると言えよう。重ねて言えば、この精神を押し拡げてゆく背景にある大きな拠り所がらしきである。らしきは、名古屋らしい、新潟らしいありさまから、いかにも金沢に相応しく、ぴったり似合う資格や意味を与えてくれる。そして建造物は、このらしきについて見える物として存在するがゆえにその価値が問われる。写真の①、②熊牛発電所（北海道新得町・S62年）は大雪山を背景に、らしきをめぐる配色や形態、空間に占める割合、材質について筆者も参加し詳細に検討された例である。公共財における見えるものへの関心は一層高まりつつある⁽¹⁾。

— 美術学生の眼ざし —

ここに掲げた5枚の色彩景観（写真④～⑧）は、1986年私の授業（色彩学演習、工業デザイン専攻第2学年）において、金沢らしい街並みや建造物の色彩をウォッチングしたものの一部である。ここでは、美術学生の持つ生得的感性を挺（てこ）にして色彩表現がなされた結果から、らしきを考察し読み替えることによって都市や建造物のありかたを探ろうというものである。たしかに、都市の色彩景観はたとえば木材の色彩は自然のままでは木色（もくじき）として、予後の色彩は定められている。つまり、青木から黒木、赤木、白木、朽木へと変移してゆく色を止めることはできない。しかし、これにペンキを塗る行為が加わった場合には、らしきやありかたは、いつ、どのように造り変えられるか定かでない。美術学生に描いてもらった理由も、変わるかもしれないらしきのシミュレーションなのである。

らしきのシミュレーションといっても、つまり絵を描く過程における、感性のブラックボッ

クスが拠り所となるわけで、結果を客観化することは容易ではない。だが一面では、美術学生が見えるものとの対話者として、システムチックな体系を経験していることも、このイメージ実験を可能にした。

らしさは、あるものに意味や資格を付与する接尾語であることは先述した。したがって、らしさを欠いた場合には、建造物のイメージが剥奪され無表情となる。そして色彩から考えるらしさの剥奪は、不調和とかあいまいさという不快な気持ちにつき合わされつづけることを意味する。では事例作品の中でらしさがどのように意識化され、またどのように色彩表現されているかを読み替えてみよう。

読み替えの規範となる言語は、知覚的にほぼ均等な頻度をもっている、CIE 1976 L^{*}a^{*}b^{*}ダイアグラムとマンセル表色系(Munsell system)を用いた。いずれも色の相違を表す尺度で表現は異っているが、関連づけられた表示方法となっている。ちなみに、マンセル表色系はHV/Cで表され、H (Hue) は色相、V (Value) は明度、C (Chroma) は彩度である。ここで参考までに測定器機(測色色差計)によりプリントアウトされるデータの模式図を掲げておきたい。色の表示方法は視感覺量が等しい間隔尺度に表現されるという大変使い易い表色系である。図①はCIE(国際照明委員会)が長い年月をかけて検討をし、1976年によく推奨に踏み切った苦心作である。例えば、図②におけるVR点は、さえた赤である。そして、L^{*}=43.7(明度指数) a^{*}=69.7、b^{*}=33.4(クロマチックネスまたは色度)と表わす。この数値は、先述のマンセル表色系に対しても数値変換が可能である。また定量的な色刺激がこのように解りやすく読めることは、桃色、水色といった慣用色名にも適用できる。

事例となっているところは、金沢市香林坊(都心再開発地区で1986年9月完成13800㎡)写真③④、犀川大橋と片町(モニュメンタルな橋と商業中心街)写真⑤、浅野川大橋を望む(市の東を流れる川と文学的風情が残る)写真⑥、俵屋あめ舗(160年程前の木色質の代表的店舗)写真

⑦、東山界隈の街並み(金沢で最も木色家屋の揃っている街)写真⑧である。いずれも色彩景観として金沢のフェイスポイントである。

まず、香林坊都心部の色彩景観の現況におけるらしさについて触れてみたい。この地区は金沢というよりも、わが国における中都市の都心らしさを語るに欠かせない代表的な場所でもある。それは、第2次世界大戦による街区焼失を免れたことによって、街のイメージが断たれることなく集積してきたことである。昭和19年11月24日アメリカ軍による本格的空襲爆撃以来、58の都市と230万戸が被災焼失した。今にして思えば、日本からイメージも何もかも消え失せたのである。そして40年後の今日、奇跡的に残された都市のイメージを自らの力で再開発変身を迫られた金沢の事例は、文化の彩り史としても貴重なものである。1986年(昭和61年)秋に再開発されるまでも、すでに2ヘクタール程のこの地区は、商業、業務と住居のビル住宅が混在し、楽しさと、時には北国の憂愁さえ落とす想像豊かなロマンチックな空間でさえあった。春にはあんずの花が塀を越す。やがて、近くの兼六園や金沢城跡の濃緑樹に囲まれて朱夏を商う。錦秋は、弱まる日射しを、複雑に入り組んだ重厚なビルや住宅が色のついた影をつくり賑わいを助けていた。冬にはいままで見え隠れの中にあった家々が色彩の主役となる。浅い茶色や、胡桃色(くるみいろ)、焦茶(こげちゃ)で揃った街並みは玄冬に暖を添えていた。このようなプレステージがあったために、再開発に当たっての色彩のロケーションは慎重を極めた。施主行政関連機関一体となつてのイメージづくりが検討された。ことに色彩修復(Color Restroration)は入念になされ、全体として、伝統的街並みと現代が色彩により脈絡化された。つまり茶系の落ち着いた色彩が基本色の範疇となつて、ベージュやソフトピンクも加わり、歴史と現代の必然一貫性を見い出そうとしたのである。たとえば写真③の東急ホテルの色彩は、うすいアンチックローズゆえに現代的でありかつ金沢近郊に産する赤戸室石のイメージとも連らなっている。また年間2800mmの雨量のあるこの地方にあって、

この石は濡れ色がローズポンパドゥールのようになって艶やかでさえある。ローズポンパドゥールはフランス陶器の名品色である。もう一群のコアカラーはフロスティホワイト（卵の花色）とアイボリーホワイト（乳白色）である。緑樹も充分にとり入れられた。

では学生の意想した色彩修景はどうであろうか写真④、街全体の望ましい景観色はオフホワイト（灰白色）またはフレンチ・グレイ（青みのフランス風なグレイ）でまとめられた。今世紀初めから、第1次世界大戦後にかけて展開したモノクロームによるモダニズム、が騒色時代の昨今、反動として若い感性を誘うらしさのキーワードとなっているのであろうか。ちなみに計測データは、色相はごくうすい青、灰青、並びに無彩色の灰色、明るい灰が中心である。明度は4、8であり中明度、彩度は1、8の低彩度で計測色数は15色である。ただし、以後も同様のことであるが、色彩景観やイメージアビリティを論じる場合には、どんな色彩が採取されたかということよりも、どんな関係にあるかといった文化景観的視座で考察することが最も優先されねばならない。

つぎに描き比べをしたのは写真⑤である。この景観視角からは、金沢の都心に入るメインゲート犀川大橋からの望見となる商業集積の最も高い景観が見られる。焦点は多色刷りの現況をどのように再考するかにあった。結果としてはダイアグラム③に表われたように全色域に亘って拡散した色彩許容を示した。色数も50色余と多く、明るく彩えている。

近年、従来型商店街から地域イメージを盛り込んだコミュニティーマートや、24時間量販店まで、都市機能の再編が続いている。その過程で色彩の果す役割は大きい。色彩は極めて個人嗜好が強く、快不快反応におけるばらつきの大い知覚に依存している。したがって、グラフ③からのらしさの検証も単線的なものではないが、ひとまず都念らしさと繁華街らしさの違いは表出されているとあってよい。

視点として大切と思われることは、繁華街は賑わいと楽しさ空間であるということと色彩現

象がどのように対応して街の資格を説明しているかを見据えることにある。このダイアグラムは10年後どのように変化をするのか予測出来れば商店街の未来も察することが可能となる。だがそのためには継続した描写調査が不可欠であるが、建造物に表われた色彩のらしさ分析が有効であることは間違いないと思われる。私共（地域振興研究所—金沢、矢ヶ崎・小堀—金沢大、山岸—金沢美大）が同様のアイデアで行った調査「景観アセスメントの手法の確立に関する研究」—伝統都市金沢を事例として—⁽²⁾においても手法の有効性が証せられている。

次に、金沢は今でも伝統都市の風情が随所にある。写真⑥⑦⑧の個所をピックアップをし、さらに建造物の色彩がらしさによってどのように説明できるか考察してみたい。

方法は前例に準じている。この対象地域の観察の難しさは周辺環境との結びつきが何処よりも濃いことである。それは、泉鏡花の文学、照葉狂言に代表されるように、地域の色彩は、やや大袈裟な表現をすれば、見える資格のある者にしか見えない囲われた中でらしさに支えられている。

見える資格を持ったであろう例は三島由紀夫にある。「眼下には、金沢の市街の古い屋根の瓦が釉を光らせ、（中略）冬の日ざしのくっきりと半ばする電車通りを、黄いろと赤に染め分けた電車が一心に走っていた」⁽³⁾たぶん昭和33年頃の卯辰山辺りからの描写と思われる。資格、つまり自らにらしさを持つ者にとってここで住まい暮らすことの心地良さはまた格別なのではないか。それ程にこの地の建造物は色彩のらしさを明示している。

写真⑥に描かれた浅野川右岸奥と、手前左岸並びに写真⑧の東山界隈は、金沢で最も古い街並みを残している。この伝統環境保存区域は、城下が賑わい始めた17世紀初期のころ、大小50程の寺院が集められて形成された。浅野川大橋の入った色彩景観は、モチーフとなった大橋のイメージが大きく問われている。1922年（大正11年）架設のアーチ橋は、もう一本金沢市内の西を流れる犀川に架かる犀川大橋（1923年・大

正12年・トラス橋)と共に金沢の景観を象徴している。架設後60年を経た今年、伝統的景観の復元をも考慮して、架設時のイメージに復元修景される。ちなみに、橋長は54.4m、幅員15.45m、橋梁型式は3径間連続固定アーチ橋である。一般国道159号線にある。昭和18年には、第2次世界大戦の金属類供出のため美しい高欄は撤去された。

この空間の分析値から推察されることは、主調色は灰みの緑である。明度=5.7、彩度=2.4である。したがって、老緑(おしみどり)やシー・モス、あるいはアンティックグリーンの風景になろうか。

老緑は若緑に対照され、シー・モスは海松色(みるいろ)で江戸、明治の流行色でもあった。

ここでのらしさは、伝統を現代に生かす、古くて新しいテーマが主題となって描かれていることがよく解る。つけ加えるならば、川面の風景らしい色彩選択がなされているのだが、川に架かる橋の色彩は風景に入り込むか、ひき立て役になるかの二極傾向が近年著しいようである。この視点は、サンフランシスコのブラウン系のケーブルカーとロンドンの赤いバスの類同と対比的調和例でも説明される。1989年3月までに化粧直しがされる浅野川大橋は、側面アーチ部の色彩に金沢郊外産出の赤戸室石(淡いアンチックローズ)がベージュグレイによって囲まれ柔らかくロマンチックな風景を助長するであろう。この選択はひき立て役の例となる。

写真⑦の俵屋あめ舗は、浅の川大橋より下流にかかる小橋近くに在る。160年余を経た歴史的建造物である。ここでイメージされた色彩は、変化のいたしかたのない強固な対象物であったことを伺わせた。木色(もくじき)の中でもやや黄土色(おうどいろ)に傾斜した色調でまとめられ、周辺との調和も優れている。このようなプレステージがある場合、なかなか大きくイメージを変えることは困難な例が多いようであることが理解された。

このことは写真⑧における東山界隈の街並みにおいても同様である。この街並は、俵屋あめ舗が単体で主格をなしているのとは対照的に、

街全体が茶色系の色彩調和でまとまっている図④。1974年から1975年にかけて行った、私共の色彩調査⁽⁴⁾⁽⁵⁾から今日まで、茶系で調和している美しい色調に変化はない。生成色(きなりいろ)の薄いベージュから、くすんだ黄色の黄土色、アクセントとしての弁柄色(べんがらいろ)など50余色である。

おわりに

今回は建造物の色彩をらしさから考えるといった、いくぶん拠り所が見えにくい分野にあえて踏み込んでみた。それは、日常描くことに情念を傾ける学生たちのエネルギーの中に、本題の解が暗示されているのではないかとの考えを学生と共に証してみたかったからである。

人間が環境をつくるのか、環境に人間が従うのか、あるいはお互いに影響し合うのであるとの見方はいつも問われる視座である。その中で、色彩という環境尺度が注目されるようになってきたのは、見えるものとの対話における常識的均衡の鍵を、色彩が大きく担っているからであろう。本来、三角形の机は使いにくい。しかし赤い机か青い机かは、色彩再現の技術・経済的余裕のない時代においては余りにされてこなかった。ところが、いかなる色彩も再現可能な現在、何を好んで使い、愛でているのかは、個人や町や街、都市、ひいては国や民族の有様を象徴する価値と見做れるようになった。1988年秋のソウルオリンピックの楽しみは、カラリンピックであったことを見ても解るであろう。

人間が描くことによって初めて手にした色彩は、土の色や草の色、ボーンカラーとわずかであった。しかしながら今日、科学技術によって自ら作り出した飽色社会をいかにコントロールできうるか、まさにその常識(コモンセンス)が問われていることがこのシミュレーションの向うから聞えてきたようである。

(以上)

註

- (1) 山田・金田・伊藤・小堀・山岸「日本の建造物」一構造と景観P136朝倉書店(1987)
- (2) 矢ヶ崎・小堀・山岸(社)地域振興研究所「景観

アセスメントの手法の確立に関する研究」NIRA
総合研究所開発機構（1982）

- (3) 三島由紀夫「美しい星」P75新潮社（1971）
- (4) Yamagishi, M., & Mori, Y. (1977) Colors
of the historical city of Kanazawa, Japan.
Proceeding of the 3rd Congress of the AIC,
Color 77,377.
- (5) 山岸政雄「土と色彩」土木技術12月号, P.62,
土木技術社（1988）

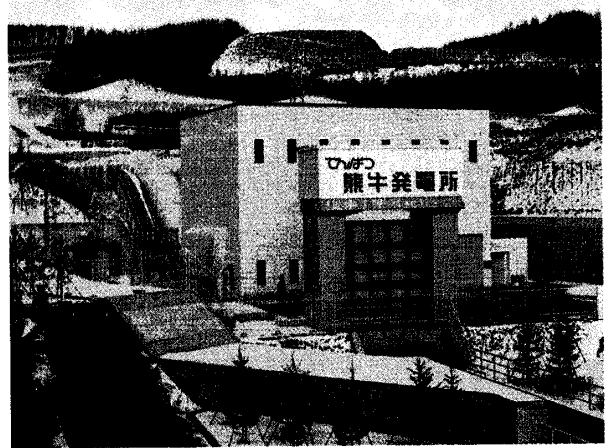
写真①撮影・日本電源開発（株）

- ② //
- ③撮影・山岸政雄
- ④絵・末松 亘
- ⑤ // 木村 稔
- ⑥ // 斎江貴志
- ⑦ // 鳴田 隆
- ⑧ // 中江田真行

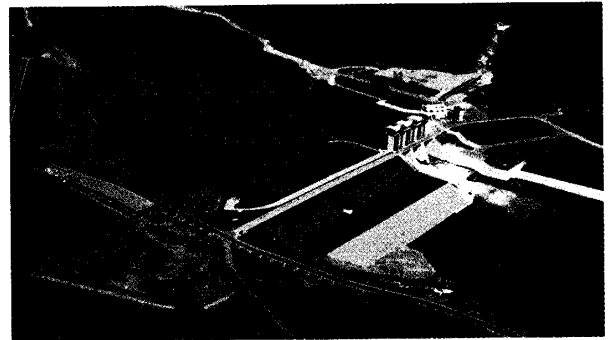
色彩計測・金沢美術工芸大学色彩研究室。

資料—日本電色（株）色彩管理と色差計の活用よ
り。

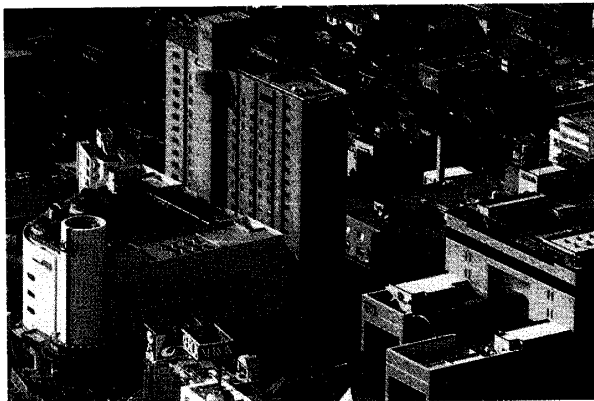
（昭和63年10月8日受理）



写真① 雪の屈足ダム洪水吐ゲート（下流側）
（昭和62年11月19日）



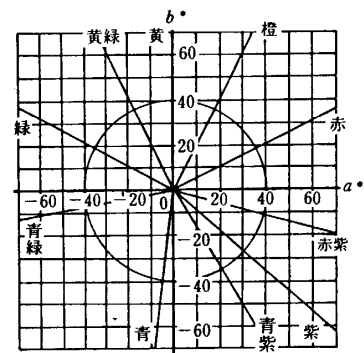
写真②



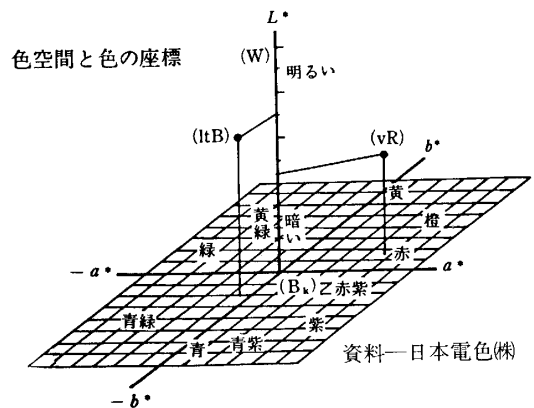
写真③



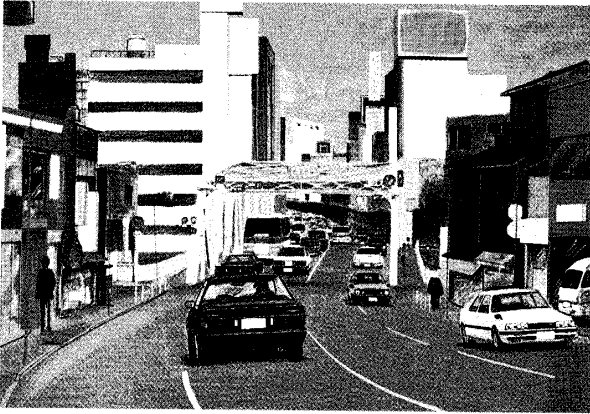
写真④



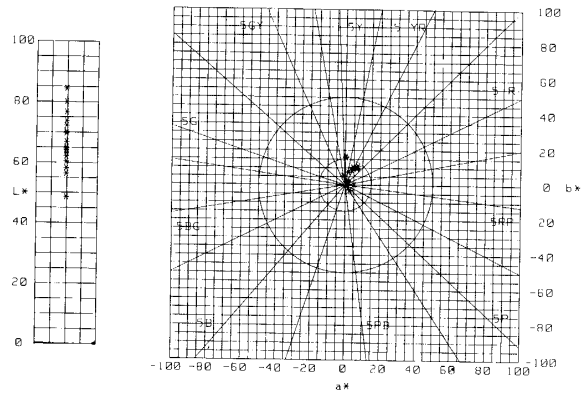
図① a* b* と色相、彩度の対応



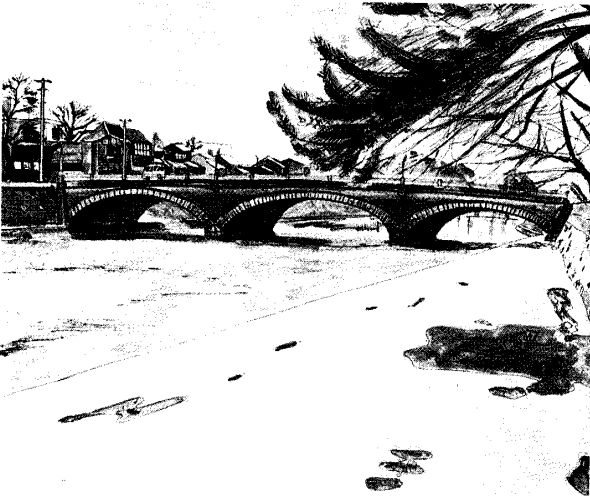
図② 色空間と色の座標



写真⑤



図③



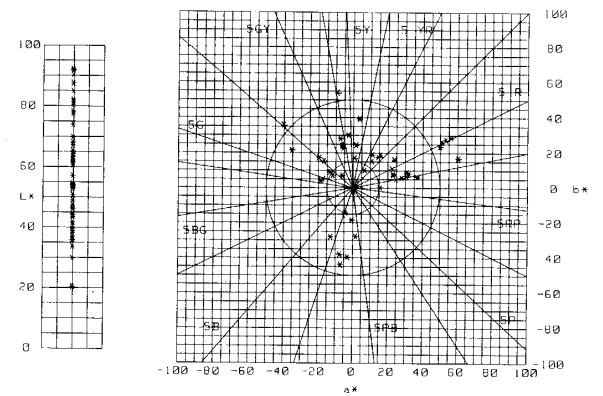
写真⑥



写真⑦



写真⑧



図④